

家康はひたすら世情の移り変わりを慎重に眺め、虎視眈々と幕府設立の機会を狙っていたが、秀吉が死んだ二年後の慶長五年（一六〇〇）には関ヶ原の戦いに勝ち、関ヶ原合戦から三年目の慶長八年（一六〇三）には、念願の徳川幕府を設立した。すなわち秀吉が死んだ五年後には、はやくも徳川幕府が設立されたわけであり、秀吉が関白となった時から数えても、十八年目であった。盛者必衰、秀吉政権はうたかたの権勢といってよかった。しかしその短かった豊臣政権に対し、徳川政権は明治維新までの二百六十年という長期政権を維持することが出来たのである。これは世界史上においても、稀有のことである。

その秘密は何であつたのか。

一口に言えば、徳川幕府の長期政権施策が徹底していたからだ。そしてその施策を確立したのが、初代將軍の家康だったのである。その後の將軍は、そのシステムの上の乗って動いていただけにすぎないといえよう。家康の力はそれほど偉大だったのである。

（つづく）

「友垣なじみ」

私（筆者）には「幼なじみ」がない。戦前は江東区の亀戸や大田区の馬込に住み、戦中・戦後は小学校二年生から五年生まで父母の里の新潟県長岡市十日町（旧古志郡十日町村）で疎開生活を過ごしたからである。そのため、小学六年生の時に、品川区立大原小学校に転入した頃には、もう幼なじみと呼べる同年配の友は独りも居なかった。

それでも、四年間の疎開生活中には、数多くの鮮明な記憶があり、その後も交流が続けていれば、おそらくひとりやふたりの「幼なじみ」は残っていたはずである。しかし、小学六年生の夏、妹と共に流行性脳脊髄膜炎という法定伝染病にかかり、当時日本でも開発されたばかりの高価なペニシリンのお陰で「奇蹟の生還」（まんじー〇四号）を遂げた。そのため、家庭生活も苦しくなり、独自のルートで「幼なじみ」と連携する知恵がなかった。この年、米国を中心としてNATOが生まれ、中華人

民共和国が建国、ドイツの東西固定化、イスラエルが国連加入、ドル・円が三六〇円に固定、映画「青い山脈」や「また逢う日まで」が封切られ、古橋廣之進が水泳の世界記録を連発、野球のドゴール監督がサンフランシスコ・シールズを率いて来日など、慌ただしく戦後がスタートしていた。

結局、生涯続く交友は品川区立の新制中学校生になって始まった。

それは、小さな偶然であつたが、わが人生に於いて、「志学」の年になってやってきた幼なじみ、すなわち「友垣なじみ」の始まりであつた。新制中学校、荏原四中はまだ校舎もなく、延山小学校や中延小学校の一部を間借りして、授業を行っていた。そんな状態もあつてか、経済的に余裕があるとか、成績上位者はみんな私立中学に進学していて、地元の大原小学校でやっとできた友達と

新井 宏

も、また離ればなれになってしまった。

それでも荏原四中は新制中学として一学年四クラス編成、私(筆者)はD組に割り当てられたが、薄暗い教室ではあったが活気があった。担任は図工科担当の辻田六郎先生、当時の感覚ではもはや中年のように見えたが実際は三〇代、やたら編入生徒が多いクラスであった。

最初の夏休みが終わったころには、疎開地から遅れて帰京してきたサ君、ソ君や、私立中学に進んではみたものの、経済的な理由で新制中学に戻ってきたユ君、ウ嬢などが編入されてきた。本来なら編入順にクラス割り当てられるべきところ、辻田先生は、引き受け手がない「何やら問題を抱えている編入生」を快く多数拾ってくれた。それが大当たりだった。不思議なことに、何か問題を抱えている割に、成績優良者が多かった。その後の高校進学結果をみると全員都立の有名進学校に入学しているのである。

もちろん、D組に当初から在籍した生徒のなかにも、編入者に伍してウ君やヤ嬢、そしてア君(筆者)などの成績優良者がいた。結局数えてみると、後に一年D組から有名進学校に進んだ者は七名である。

荏原四中では毎年新学期に学級編成を行っていた。一年生の時に四クラス編成であったのが卒業時には五クラスE組まで増えていて、同じ基準で言うところ、全学年で有名進学校に進んだ者は、十名であり、その中には、三年

つ紹介しようとするものではない。しいて言えば、「アサナウ会」と言う異例なグループを群像として描いて見たいのである。そのため、「アサナウ会」の登場人物は全てカタカナの**創英角ポッフ**体略称を用いる。

まず、別表1に登場人物の略称を一覧で示す。

実は、一年D組のメンバーの交友が、中学一年生の時に始まり、その後ずっと絶え間なく続いていたのではない。それは皆が高校や大学を卒業して社会人になる頃から始まった。

中学校一年生の頃は、成熟の早い女生徒を除いては、まだ幼さが残っていた。成熟した女生徒から見れば、男生徒は余程子供じみて見えていたに違いない。

だから同じクラスで学びながら、そこには一体感などというものはあまり無かった。とくに、女生徒側から見れば、小柄なサ君などは、まだ可愛い坊やであり、最も身長のあるア君でさえ、いつも青っ鼻をたらしはては、ズルズルと吸り上げていたとからかわれていた始末である。ア君は当時、蓄膿症をわずらっていて、彼女たちの観察に間違えはなかった。

「アサナウ会」を名乗るのに重要人物である十君は一年次にはB組で同じクラスではなかった。ただし、十君はア君やユ君と大原小学校からの仲間であり、しかも三年生の時にはサ君や女性メンバーのウ嬢と同じC組であったのが、連携するきっかけとなった。

生の二学期になってから都立高校受験のため、あからさまに地方から編入学をした者もいた。全校の卒業生は二八三名と記録されている。

なかなかありそうも無い確率を紹介したのは、ア君の「友垣なじみ」の物語が、そこから始まるからである。しかし以下の物語は、何もその「友垣なじみ」を独りず

表1 「友垣なじみ」の関係図

会員	略称	小学校	住居	荏原四中		進学 都立高校
				一年	三年	
アサナウ会員	ア君	大原小	豊町	D組	A組	小山台高
	サ君	大原小	豊町	D組	C組	小山台高
	ナ君	大原小	戸越	B組	C組	小山台高
	ウ君	大原小	豊町	D組	D組	三田高
	ヤ嬢	大原小	豊町	D組	D組	三田高
	ウ嬢	大原小	戸越	D組	C組	三田高
準	ユ君	大原小		D組?	A組	小山台高?
外	キ嬢				D組	
	ソ君			D組?	B組	三田高
	ノ君				C組	小山台高
	ム君				E組	小山台高

都立小山台高校：旧府立第八中学校
都立三田高校：旧府立第二高等女学校

一、「アサナウ会」の家庭環境

当時の荏原四中では、二八三名の卒業生の内、高校進学試験(アチーブメントテスト、全日制の他に定時制・通信制等を含む)を受けた者が一二八名と記録されている。これは受検者の数であり、合格者数ではないが、当時の制度では二次志望、三次志望などの救済制が働いていたので、おそらく合格者基準でみたならば、一二〇名ほどとなったであろう。すなわち高校進学率は定時制・通信制等を含んで、四二%程度であった。

それに対して、全国統計を参照すると、全体の高校進学率は四八%、東京都の高校進学率は五九%で、いずれも進学先には定時制・通信制を含み、分母は新制中学校の卒業生で私立中学校卒業生を含まない。すなわち、荏原四中の高校進学率は、東京都平均の五九%はもとより、全国平均の四八%から見ても、かなり劣っていた。

このことは、荏原四中の家庭環境が全国平均より低水準であったことを示している。因みに当時の荏原四中から大学まで進学した男生徒は二〇名弱、一五%程度であり、昭和三〇年基準では、全国の男子平均とほぼ等しいが、女生徒に関しては、進学該当者なしで、全国平均の五%に比較して著しく劣っていた。

都立進学校小山台高校は、男子三〇〇名、女子一〇〇名を別立てで選抜していたので、暦年、女子の競争率は

中学側で全員合格になるように調整していた。そのため、女子受験生は男子に伍して大学進学を目ざす成績優秀者が半数、残りの半数は入学し易いので希望した者であり極端に層別されていた。

このことは、**A**君の四歳年下の妹とその妹の友人で後に**A**君の妻となった者の事例をみるとよく分かる。二人はいずれも大学受験を念頭に小山台高校に入学したが、**A**君の妻の場合、家庭は熱処理業を営み、経済的には豊かであったが、父親が「大学などに行く」と嫁の貰い手がなくならぬ」と強烈に反対したため、断念せざるを得なかった。**A**君の妹の場合も、既に**A**君が大学に進んでおり、末子の弟も当然大学進学するので、長女を進学させると次女もとなり、折から母親の体調不良もあり、断念させられた。ただし次女の頃には「合格したらOK」となり、無事大学に進学している。

ところが妻の一歳年下の妹の場合は、あくまで「許可を得る事が出来ず」結婚後、子育てを終えてから共立女子大の大学院まで履修している。

おそらく、当時、品川区や太田区の場合、家庭環境としては大学進学の経済力があっても、似たような理由で進学出来なかった女性が多かったと思われる。

ここで「**Aサナウ会**」メンバーの家庭環境や成年後の活動を整理してみよう。

ス鋼生産量が世界最高を記録した中で、日本の研究者としてばかりでなく、世界的な特殊鋼研究者としても認められた。

その経歴により退職後、韓国国立慶尚大学に呼ばれ、足かけ八年間招聘教授をつとめ、その過程で「金属考古学」あるいは「古代計量史」の研究を極め、ともすればアマチュア研究者を見下す保守的な考古学界にあって、専門家に伍して活躍、数少ないアマチュア研究者として評価された。

② **サ**君の場合

女・女・女・男・女の五人きょうだいの第四子。家庭は戦前深川で砂糖問屋をやっていたが、父親は身体が弱く、**サ**君が中学生になる頃には経営にタッチしていなかった。きょうだいは女性ばかり、疎開地の千葉県茂原から引き揚げてきた直後で、外見から見ても経済的には厳しかったようである。

サ君は女性ばかりに囲まれて育ったせいか、長じてからも女性的な面があった。戦前幼稚園には通い始めたが、甘えん坊で続かなかったという。

大学は早稲田に進み、漫画ばかり読んでいるような生活が続いていたが、社員が百名に充たなかった旭通信社に入社、営業として「アニメ」のドラえもん、アルプスの少女ハイジ、サザエさん、鉄腕アトム、仮面ライダー、巨人の星、宇宙戦艦ヤマトなどを担ぎ、大塚製薬等の大

前述したように、メンバー全員が都立の有名進学校に進んでいる。各家庭が平均より特に豊かであったわけでもない。何か共通点はないだろうか。また成年後の活動に共通点はないだろうか。少なくとも、男生徒群の場合、いわゆる社会的な成功と言う点で評価すれば、荏原四中卒業の男生徒を母集団とするかぎり、メンバーはかなり高い水準を誇れる。ひいき目にみていることを承知ながら始める。

① **A**君の場合

男・女・女・男の四人きょうだいの長子、父は戦前南興水産の会社員であったが、敗戦で失職、戦後は若い頃に修行した大工に戻って、工務店を始めていた。**A**君とその妹が法定伝染病の流行性脳脊髄膜炎という大病にかかり、家庭の経済に大きな打撃をうけながら、折からの戦後復興ブームで極貧というほどのこともなく、家はしばしばメンバーの集会場となっていた。メンバーで唯ひとり戦前**A**君は幼稚園を修了している。

東工大を卒業してから就職した日本金属工業では、しばしば左遷も受けながら、左遷があるから右遷(出世)もあるのだと割り切り、我が道を進み、常務取締役まで昇進、退職後は趣味の考古学の研究を本格的に始め、専門書四冊の他、考古学論文・論考を九〇件ほど発表している。

会社はステンレス鋼専門の中企業ではあったが、鉄鋼協会と金属学会で論文賞を受け、折から日本のステンレ

手スポンサーを獲得し、会社を電通、博報堂に次ぐ広告業界三位に躍進させるのに大きく貢献した。その結果、最終的には取締役副社長まで出世している。

営業社員として伝説的な活躍をしたが、入社数年後に得意先の日本緑十字社に勤務する三歳年上の幹部女子社員との間に、子供ができ結婚する。このような性向は、結婚後も続き、奥さんは非常に苦労した。しかし、奥さんは気弱な**サ**君に代わり、時には旭通信社の創業者の稲垣正人氏と直接談判をするようなところがあった。

競争の激しい広告業界は、過去の業績だけでは、いずれ失脚する厳しい業界、後年になると、関連会社の管理なども任されるようになったが、それは主流からはずれることでもあった。しかし旭通信社をバックにすると、見かけ上の成績は向上するので、自分の才能を誤認し、ガードが甘くなり、詐欺的な売り込みに引かかってしまふこともあった。

そのひとつがカネミ油症事件で大問題になっていたPCB(ポリ塩化ビフェニル)の無害化技術を巡って、**サ**君が化学的な処理方法の特許に飛びついたことである。平成十年頃であったと思うが、**サ**君から電話でその特許を五千万円で買って企業化したいとの相談であった。

その頃、**A**君も電気溶解炉を持つ会社で、その設備を利用して無害化事業に参入できないか検討していた。要はPCBを千百度で加熱すれば、無害化できることを

知っていたからである。それに比較して、化学的処理法は特殊装置が必要で、コスト的には太刀打ちできないのが一般的な認識であり、素人がそんな「特許」に飛びついたら大けがするから「絶対やめとけ」と薦めた。しかし、なかなか納得せず、電話は三時間も続いた。

問題はそれで終わったと思っていたが、後日になって旭通信社に来てほしいとの連絡が入る。**サ君**が集めた技術者が数人集合していた。どうやら最初の電話の時には既に「特許」を購入することを決めていたらしい。

買ってしまったことは仕方ないが、何とか騙して転売すると言う。その無責任な発言に腹を立て、「二百万円でも売れたら儲けもんだ」と啖呵を切って、企業化だけは絶対思いとどまるようにと集まった技術者達に訴えた。副社長の地位にある**サ君**が決済したこと、旭通信社にとってはたいした損害ではない。

ところが**サ君**は私財でその「特許」を買い取ったらしい。失敗を公にすることができなかったからであろう。

数年すると**サ君**が新しく設立したエコパルという電磁波防御の設備を開発する会社から五十万円の出資を求める「回状」が届いた。内容を分析すると**サ君**は既にエコパル社に一億円近く注ぎ込んでいる模様。おそらくPCB関係での出資一億を加えると、個人負債が二億円は下らない。当然、家屋敷も既に担保に入っている。旭通信社からの退職金他を投入しても既に立ち行かないのが明らかであった。

かであった。

結局、早めに自己破産するしか救済のしようがないと強く薦めたが、エコパル社に引き込んだ社長等の出資者の手前、そんなことはできないと頑張る。

結局、半年後にはやむなく自己破産して、周囲に大損害をあたえてしまい、年金収入だけに依存する生活に入って既に二十年近くが経過している。その間に、**ア君**は**サ君**に小口で合計すると八十万円ほど用立てしているが、一切返済はない。**サ君**のATM替わりみたいな役割であるが、「友垣なじみ」の時代を共に過ごした楽しい思い出に免じて、**ア君**の家計に重大な影響が無い限り黙って協力している。

③ 十君の場合

女・女・男・女・男の末っ子。父親は役位のついた会社員のようであり、家屋が戦災に遭わなかったこともあって、高校生の頃には既に自室をもっていた。兄は東京工大を卒業し姉達もある程度的高等教育を受けていた。本人は末っ子で幼稚園に通い始めたが続かなかった。

運動神経が抜群で、大学は慶応大に進んだが、二年度を終了後、国営の宮崎航空大学に進んだ。日本航空の初期のパイロットでそれなりの重責を担っていたが、その一方で**サ君**と共に昭和山岳会の主力メンバーとして「百名山」を完登している。

六十歳の時には、仲間とエベレスト登頂をめざしたが、定時制で中央大学を卒業した。職場の許可を得た後である。**サ君**と同じ頃、若くして社内結婚した。

定年まで勸業銀行に勤め、不動産鑑定士の資格を得て、日本不動産研究所に再就職した。国家資格の不動産鑑定士の資格取得には、通常、弁理士、税理士と同等に二〇〇〇時間以上の勉強時間を必要とするとされており、弁理士の三〇〇〇時間や公認会計士の二五〇〇時間ほどではないが、かなりむずかしい資格のようである。

ウ君の弟も税理士の資格を得て、地域では知られた人物であった。

⑤ ヤ嬢の場合

妹が何人かいたようであるが長女であること以外の詳細は知らない。**ウ君**の場合と同じように、父親が電気関係の技術者で、電気関係の下請けをしていたようだ。中学生の頃は、早くから成熟していて、成績は女生徒のトップ。三田高校を卒業後、古河電工に就職し定時制の戸板女子大に通っていたが、職場結婚で退社した。ご主人と**アサナウ**会のメンバーとの間にも交流もあった。しかしご主人の関西転勤で、交流が途絶え、帰京後**アサナウ**会に再参加したところから会の活動が活発になった。

⑥ ウ嬢の場合

女・女・女の長女。父親が戦前の映画俳優で、武将姿のプロマイドを持っていたのを見たことがあるが、病身だったようで、かなり困窮していた。そのなかで私立の

日本式の高地順応に日時を掛けたため、体調をくずしてしまつた。その経験から、エベレスト登山は短期間で登頂を志した方がよいとの意見を持つている。

航空機操縦では信じがたいような現象をしばしば経験したようであるが、欧州航路を主として飛んでいた関係で、各地の話を聞くと面白い。

結婚は**ア君**と共に二十九歳になってからで、お相手は日航の端麗なスチュワーデス。娘さんの一人が、スペインに留学しスペイン史を学んでいたが、**十君**と一緒に一ヶ月掛けてスペインのコンポステーラ巡礼を果たしている。その前に**ナ君**は四国八十八ヶ所霊場巡りも済ませていた。

ある時、**十君**に電話したが、在宅せず奥さんと長話をしたことがあるが、大学の先生を希望する娘さんの就職先が、なかなか見つからず、韓国等の事情を聞いていた。

④ ウ君の場合

男・男・女・女の長男。戦前、父親が電気関係の技術者だったようで、自宅の一部で、電気部品を製造していた。しかし、経済的には好不況の波があり、隣に住む**ア君**の家にも時折寸借に訪れていた。地域的には通学地域としては大原小学校であったが、隣の宮前小学校に通っていた。大原小学校より学校の序列が高いからだとの噂があり、教育熱心な家庭だったようである。

しかし小山台高校を卒業後、勸業銀行に就職し、後に

女学校に進学したのは、おそらく母親の影響だと思う。俳優に憧れて結婚したのではないかと思っているが、見栄っ張りのところが感じられた。三田高校卒業後は豊田自動車に就職し、始めてのモーターショーでは、高卒の新人なのに、かなり張り切っていた。

職場結婚であるが、プロポーズされた時には、家庭の事情、すなわち、両親に替わって、妹達を育てる必要があるため、職場を止める訳には行かないからと何回も固辞したという。しかし、ご主人になる方が、経済的な支援をすることで婚約に至った。婚約に至った日はクリスマススイブで「アサナウ会」のパーティがア君の家で開催されていた。

以上、まとめてみると、各家庭ともに、戦前には中流階層に属していたようであるが、子沢山のこともあり、戦後の生活は近隣の家庭に較べて似たり依ったりで、決して豊かではなかった。ただし、各家庭、両親とくに父親の教育水準は当時としては中以上であったようである。

一方、メンバー六人の成績は卒業生二八三名のなかで、全員上位五%以内(一〇位以内)には入っている。新制中学校というところで、成績優良者が数多く私立中学校に進学してしまったことを考慮しても、全中学校卒業者の上位一〇%以上は確実である。

その後、ア君とナ君の結婚は当時として最も晩婚となる二十九歳と大分遅れたが、お互いの婚約者の紹介を兼ねて、銀座でパーティを開き、更にア君の結婚式の場合には、披露宴に全員集合、宴後の二次会には新郎新婦を追いついて、盛大に二次会を開催していた。

その後はかなりの中断があったが、荏原四中の同期会が一九七五年に行われたことをきっかけに、女性群の子女も一段落して、各組の同窓会が行われるようになり、「アサナウ会」も復活し、数年に一回、不定期ながら続けて開催するようになった。

三、「アサナウ会」の意味

ここからア君が私(筆者)に戻って、「アサナウ会」の意味を考えてみる。

まず疑問は「幼なじみ」いや「友垣なじみ」の会が、なぜこんなに長く続いたかということである。少なくとも私の周辺ではあまり見かけない。その原因は日本には「社交」という夫婦単位の交流の場がほとんどないということだと思う。

類似の経験を思い出してみる。

① 東工大の物理コースの同期会

卒業後、今まで毎年休み無く続いている。流石にコロナ禍以降は、出席者三、四名という状況におちいつているが、卒業生数が二十名弱のコースにあっという間も半数

このことから、小結論を急げば、進学時の家庭環境では、経済的な豊かさは大きく影響せず、家庭の知的な雰囲気とか、家族の遺伝子面の影響が大きいと言うことである。

二、「アサナウ会」の性格

「アサナウ会」の性格を決めたのは、しばしばグループで山登りを実施したことである。そもそもナ君やサ君は昭和山岳会の会員であり、その影響でア君もウ君も夏山には一緒に登っていた。

その流れで、昭和五九年の夏休みに、往きの夜行を含めて、三泊三日の日程で磐梯山から五色沼、一切経山を経て土湯温泉まで縦走したことがあった。メンバーは六人の他にキ嬢も加わり総勢七人、年齢も二十歳で思春期真っ盛り、遠慮のない「友垣」であり、一気に相互間の距離が縮まった。その後、近隣の高尾山や丹沢へのハイキングを繰り返し、大学祭やダンスパーティに誘うなど、交流は日常化していった。

その頃、まだ「アサナウ会」と名付けた会合はなかったが、ア君の誕生日がクリスマススイブであったので、誕生会を兼ねて毎年集まる習慣は続いていた。

そうこうする内に適齢期のヤ嬢やウ嬢が早々と結婚、それに続いてサ君やウ君も結婚し、嬰兒つれの会も続いた。

近くは出席して、旧交を温め情報交換会のような飲み会を行っていた。学生時代にはほとんど授業に出席しなかった私ではあるが、逆に最も出席率がよい。

それなりの楽しい会ではあるが、二十年ほど前に、奥さん同伴の会を続けて三回ほど行った。夫人方が四、五人参加するだけで会の雰囲気さがらりと変わる。意外や意外、奥さん方の発言がむしろ主になる。お互い「よその家庭」をのぞき見るような好奇心もあり、盛り上がるのである。

私の妻は悔し涙の「高卒」であるが、その他はみな「大卒」、同期生には地方出身者も多いが、もうその当時には「女が大学など出ると嫁の貰い手がない」という時代が終わっていたことを感じる。

② 国際計量史学会のパーティ

まだ現役時代であったが、国際計量史学会に二回参加したことがある。最初は平成四年のフランスのルール、次は平成九年のドイツのジーゲンで、各々三日間の会期であったが、研究会というより、昼食会や夕食会に十分な時間を取っていて、歓迎会や懇親会の連続の趣がある。国際会議なので夫婦での参加を歓迎していた。妻を連れていっても、なじめず不愉快な経験になるかも知れないと危惧したが、その埋め合わせはついでにフランス旅行でと一週間ほどの追加休暇を取って臨んだ。

ヨーロッパからの参加者は奥さん連れが多い。国際学

会と言っても、日本で言えば、北海道とか九州での開催に近く、発表者自身が女性で丹那さんを同伴してきている例もある。ただし、中国からは著名な女性研究者が参加しているが、同行者はいない。

毎日パーティがつづく。吃驚したのは、その中で言葉の通じない妻があたかも主客のように振る舞っているのである。ヨーロッパはこんなことには手慣れている。すこし着飾った妻を上手に持てなし、日本からの女性客というだけで話題にし、妻が日本の折鶴の作り方を紹介すると喝采であった。

ただ、中国からの女性研究者はアテンドする者が無く寂しそう。そこで、威力を発揮したのが、漢字での筆談である。それが周りの出席者の関心呼び振わう。

男性だけの研究会であれば、こんな交流は生まれない。その後、日本にやってきた中国の研究者を家庭料理で持てなすこともあった。

③ ユーラシア社の欧州団体旅行

定年を機にユーラシア社の主催する欧州旅行に十回ほど参加した。同社の日程はほとんどが二週間で、やや割高な感じがするが、妻の言うように、遠い欧州の場合、長い日程ほど珍しい観光地もコースに入っているし、第一、往復の旅費まで考えれば割安である。前に行ったフランスとドイツを除くと地域数で十三ある。夫婦にとって貴重な思い出である。いまでもしばしばパソコンに

ファイルした膨大な写真を楽しんでいる。

その中で、二人の意見が一致しているのは、一日三回の食事時の交流の思い出である。参加者は多くても二十名、その中に夫婦参加は六、八組ほど、大体数回以上食事で同席する。

過去の旅行先の話も多いが、姑さんの話題が多い。どこの家でもありそうな話題であるが、奥さんの話はしばしばエスカレートする。それをニヤニヤしながら聞き流すご主人。その中で、我が家や兄弟姉妹の家庭を重ねてみる。

何よりも漏れ聞こえてくる夫婦間の会話を吃驚する。実に多様な夫婦の姿があるものだと思う。夫婦間で敬語を用いて会話しているかと思うと、夫が「間違っていたらぶつ飛ばすぞ」と言うとか夫人が「私が正しかったらけつとばすわよ」と応じている。

そして、十五日間の擬似的な「社交」が終わる。みんな打ち解けて解散する。

③ 「アサナウ会」の場合

女性群が結婚したばかりのことであった。ふたり揃ってご主人の帰宅が遅いと嘆いている。

かつての才媛・才女が何たることか。育児ノイローゼにもなるという。いずれ我が家でも同じようなことが起こるかも知れないと勉強にはなった。後年になるとご主人の親族やお子さん達の話題も出て来る。

ウ嬢の長女的美菜さんが「アサナウ会」でやっとハイ

ハイをしていた頃を良く覚えていた。

小学校の先生になり、東京都の離島青島に赴任していたという。教育熱心で管理職に昇進することを拒否し続けた結果の「島流し」だと言うが、人生、減多に経験出来ない話題が惹き付ける。ウ嬢にもそんな傾向があったことを思い出す。

ウ嬢はサツカーなどでこの第一人者である長谷川唯とそっくりな容貌、サツカー界の美人として、英国サツカー誌の表紙を飾ったこともあるが、厳しい顔をするとかちょっと怖いながらも魅力である。ウ嬢もそんな感じがあった。

そのウ嬢が亡くなったことを美菜さんから知らせてくれた。既に「アサナウ会」のメンバーも八十七歳。ウ君も数年前に亡くなっている。

思えば、高野辰之の唱歌『故郷』の「如何にいます父母、恙なしや友垣」の世界も遠くなった。

高野辰之については、「まんじ一六二号」に少し書いた。その時の主人公藤井宣正の妻瑞枝の妹鶴枝の夫である。

兔追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

如何にいます父母
恙なしや友垣
雨に風につけても
思いいずる故郷

こころざしをはたして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷
水は清き故郷